【第２部】

太平洋地域への人類拡散・海洋文化館所蔵カヌーの調査と建造プロジェクトの意義

南山大学教授　後藤　明

海洋博覧会が行われた 1975 年は太平洋の文化にとって重要な年であった。それは今日につながる太平洋のカヌー復興運動の魁けとなった、ハワイのホクレア号が完成した年であったからである。同じ年にサタワル島からチェチェメニ号が海洋博に到来したことも偶然ではあるまい。

ホクレア号をデザインした、ハワイのカヌー研究家のハーブ・カネ氏はほぼ同じ時期にもう一隻のカヌーをデザインしていた。それが海洋文化館のエントランスで来館者を歓迎するタヒチ型のダブルカヌーである。このカヌーはクック船長も記録している、タヒチのカヌー作りの村タウティラで製造された。

タウティラの人々は一足先、1960 年代、ハリウッド映画「バウンティ号の叛乱」のタヒチロケのために伝統カヌーの製作を行っていた。彼らはこのとき二隻のダブルカヌーをはじめ大型の航海カヌーなどを復元して製作していた。そのタウティラの人々がハーブ・カネ氏のデザインに基づいて製作したのが海洋文化館のダブルカヌーである。カネ氏のデザインはクック船長などの残した図面に基づいている。

カネ氏はタウティアの人々に「このカヌーはポリネシア型だから、ココヤシの紐もポリネシア型の組紐を使うように」などと細かい指示をしている。その手紙の一部がダブルカヌーの脇に展示してある。完成したカヌーは日本に輸送されたが、そのさいタヒチと日本との友好関係を築くためにこのカヌーを贈る、というタウティラ村村長、トゥタハ・サロモンのタヒチ語の手紙も展示してある。リニューアルの過程でこの村を訪ねたとき、カヌー大工の棟梁の未亡人に面会する機会をえた。彼女は「このカヌーを再びみて、死んだ夫の魂も戻ってきたように感じる」と感涙にむせんだ。

また海洋文化館の大型カヌー展示空間にはパプア・ニューギニアのトロブリアンド諸島から来た、交易用のクラカヌーも展示されている。「クラ」という交易活動は人類学的には必ず教科書にのるほど有名な風習であるが、このカヌーは実際にクラの交易に使われたものである。その模様は「すばらしい世界旅行」の中でも伝説的なドキュメンタリーとして知られている。リニューアルの過程でこのカヌーが使われていた村で、実際にこのカヌーに番組が収録されたときに乗っていたという古老に出会うこともできた。熱帯の気候では外に置かれたカヌーはせいぜい 10 年ほどしか保たないので、タヒチのダブルカヌーもクラカヌーも元型を保っていること自体、彼らにとっては奇跡、すなわち「死んだと思っていた子供に巡り会えた」、ような感動を呼び起こすのである。

今日、太平洋の人々は自分たちのルーツを知り、誇りを取り戻すためにカヌールネサンス運動を起こしている。その火付け役が上述のホクレア号であるが、ホクレア号の播いた種が太平洋中に飛び火しているのである。そして海洋文化館もそのカヌールネサンスの根っこの中から生まれていたのである。

2016 年 5 月、グアムで開催された太平洋芸術祭のおり、東京文化財研究所と南山大学が協賛して「太平洋カヌーサミット」が挙行された。現在、太平洋各地でカヌー復興に携わっている方々が一同に会する歴史的なイベントとなった。海洋文化館を運営管理する沖縄美ら島財団もこのイベントに参加できたことは大きな意義がある。今後は沖縄を含めた海洋文化復興の拠点として、海洋文化館は発展していくべきであろう。